

みる 観察

単位の経済学

— 土地面積と農産物収量、

そしてその関係 —

一般社団法人 北海道地域農業研究所

所長 坂下 明彦

外国で農家調査をやった時の失敗談で比較的多いのは単位に関わるものである。ずいぶん前になるが、中国の黒竜江省で最初に稲作の調査をした時、水田面積は何ムーですかと聞くと六ムーという答え。ムーは一／一五haであるから四〇aかと思ったら、実は東北では一ムーは「反」と同じ一〇aで「大畝」だという。したがって六〇aというわけで、何戸分かの調査ノートを訂正した苦い経験がある。おまけに、haと同じ「垧」と言う単位もある。

この土地面積の単位は、国によってま

ちまち、おまけに国の中でも地域によって違うことさえある。メートル法の普及によってm²、a、haを使うことになっているが、大国は平気でエーカーを使っている。中国でも中国統計年鑑では公頃(ha)を使うが、中国農業年鑑(農村向け)になると畝(ムー)を使っている。日本でも坪はまだ生きているし、町や反も何とか通用している。

では、実際の面積はというと、FAOの統計は土地面積ではなくあくまで播種面積であり、条件が整わなければ利用できない土地の存在を示唆している。これ

も三〇年前のタイの調査のことであるが、この水路は警察に袖の下を使わないと水が来ないと「緑の革命」の内実を聞いたことがある。天水田になると警察ではなく、雨乞いとなる。遊牧の世界になると、最近行った内モンゴルの調査では、どこそこ、例えば「東の砂地」は一〇、〇〇〇ムーくらいかなという大まかさが、草地の個別配分の際に測量が行われ面積が意識されるようになったと聞いた。調べなければわからないというのが面積の常識であり、水田面積は畦畔込みか水張面積かなどと調査の前に議論するのは日本くらいかもしれない。

つぎは、農産物の収量。一番衝撃的だったのは、一九九〇年のポーランドの調査である。一月月田舎で住み込んで調査したので、必死に調査表を埋めることもなく、家回りをぶらつきながら質問ができた。納屋の二階に飼料用の穀物がバラ積みしてあったので、このライ小麦はどれくらいあるのでしょうかと質問した。「そんなことは牛に聞いてみな、いちい

ち計って喰わせているわけじゃないんだから」。さらに、「共産党ならうちの畑の等級の収量を決めているから聞いてみる」と言い」と。収量は容器に入れていくらであり、自給では計る必要はない、計画経済の水準はこんなもんだとの鋭い指摘である。

その入れ物。稲作の収量については、日本では玄米で一俵六〇kg(七十二と)というのが基本である。ところが、世界的にみれば、米のかたちは農業では粳、コメ産業では精米、この境目に精米所があるというのが普通である。入れ物は韓国では吠(かます、カマニ)で粳一〇kg(精米で八〇kg)、タイで見たときは粳一五〇kgであった。中国では、ビニール袋で大きさは関係ないという。体積ではなく、重量であり、ばら積みが基本である。農家は粳で売るのでから本当のところはわからない。粳一〇〇・玄米八〇・精米七二というのが平均値とされるが、水分量という厄介なものもある。

そして、この土地面積と農産物の収量

との関係。日本では土地生産性の指標である反収という神様のよつなものがあり、メートル法となっても一〇a当り収量、単収という置き換えをしつつ存続している。もとを質せば、太閤検地による石高制の実施とその基礎になる度量衡の統一があり、ひとと土地が合体されて貢租徴収が行われる単位となった。もつとも、幕藩期にはいささか乱れていたが、一八七五年の地租改正と度量衡の再統一でタガはめられた^(注1)。そつという意味では、日本の反収というのは特別に重要な単位だったのである。

こんな頭で韓国忠清北道の農家調査に行ったところが、またまた衝撃を受けることになった^(注2)。水稻の一〇a当たり収量は四八〇kgですと通訳は言ったのだが、これはなんか違う、言ったとおりに訳してといったところ、その農家は一石(セン、二二〇kg)を収穫するための面積が七〇坪だと言っていたのである。普通だと一マジキ(一五〇坪)当たり四力マニ(吠、六〇kg)というべきところで

ある。借地料についても一吠(カマニ、精米八〇kg)を払うのに見合う土地面積、例えば二〇〇坪、三〇〇坪、五〇〇坪という言い方をする。この表現は、米の一定量を確保するためにはどれだけの土地が必要かという日本の反収とは真つ逆さまの発想なのである。私はこれを「収単」と名付けた。

単位と実際の使い方には日本の常識をはるかに超えたバリエーションがあり、それを知ることが土地とは何か、農業の生産力とは何かという基本概念を考え直す契機となろう。海外との往来が自由になり、思う存分フィールドワークを楽しまいたいものである。

(注1) 荒木田岳『村の日本近代史』ちくま新書、二〇二〇

(注2) 糸山健介・坂下明彦・朴紅「韓国中山間地域における農業構造の特質」『農経論叢』第57集、二〇〇一。宮嶋博史『両班—李朝社会の特権階層』中公新書、一九九五も参照。